

「ぎみよつむりよひ」 「学ぶ」は「まねる」

「あなたのお家のご宗旨は何宗ですか」

「ええっと、ええっと、ッキミヨウムリヨウ」だったかな」

浄土真宗の信者の家庭に育った人たちにとって、「帰命無量寿如来」で始まる「正信偈」は、もともと身近で、いちばんなじみ深い聖典です。だから、「おしょうしんげ」とか「しょうしんげさん」と呼ばれてきました。宗派やお寺の名前は忘れても、帰命無量^{きみやうむりやうじゆにょらい}は心のどこかに残っているのでしょうか。

私が初めて「正信偈」を唱和したのは幼稚園の頃だったと思います。父が朝のおつとめに「正信偈」を拝読していましたので、それを真似^{まね}しただけです。だから、意味はまったく知りませんでした。

「学ぶ」は「真似る」から来たといえます。子どもたちは非常にすぐれた模倣の本能によって、おとなの行為を真似し、人類が積み重ねてきた文化や知恵を学ぶのです。

浄土真宗の家庭で「正信偈」が身につく、なじみ深い聖典になったのも、家族そろって朝夕仏前で「正信偈」を唱和する習わしがあったからでしょう。「正信偈」は、自然のうちに親子や孫へ伝えられていったのです。そのような場が大切ですね。

灘本愛慈^{なだもとあじ}先生が、「今から思いかえますと、信仰に心ひかれてお勤め^{つと}するようになったというのではなくて、お勤めの場にすわり、共に唱和するようになってから、仏法を聞く身にしていただいたようです。お勤めの大切なことを思わずにおれません」(『季刊せいてん』No.1正信念仏偈①)と述べておられるのがよくわかります。

しかし、現代は社会情勢が変化し、核家族化が進み、人間関係が希薄になり、家庭での唱和の機会が少なくなってきました。これからはお寺をはじめ、どこでも「正信偈」を唱和する機会を数多く設けるべきではないでしょうか。

昭和二十三年(一九四八)、蓮如上人四百五十回遠忌の記念事業として、現代語でおつとめができるように、意識^{いしやく}勤行^{ごんぎやう}が制定されました。

「讚仏偈」を意識して「さんだんのうた」に、「重誓偈」を「ちかいのうた」に、「十二礼」